

鹿児島における子どもの生活実態と社会階層

神 田 嘉 延

(1981年10月18日 受理)

Life Status of Children and Social Class in Kagoshima

Yoshinobu KANDA

目 次

はじめに

- 1 子どもの日常生活習慣と社会階層
- 2 子どもの生活時間・リズムと社会階層
- 3 子どもの生活にみる親子関係と社会階層
- 4 子どもの生活での家族の位置と社会階層

は じ め に

本稿は、鹿児島子ども研究センターが、1980年6月に実施した「鹿児島の子どもと親の生活と意識」調査の分析結果の一部として、子どもの生活実態と社会階層をのべたものである。すでに、1981年5月に、研究センターとして、調査報告書（第1次）が発表されている。この報告書において、「調査の方法と対象」を明らかにしている。調査票は母と子どもがセットになっており、調査対象数は、小学5年、中学1年、中学3年と3学年にわたり、地域は、商業地区、旧住宅、新興住宅、近郊農村と4地域を選び、1地域1学年200になるように調査を行なっている。4地域の総計は、2351組である。（各地域、各学年、男女の数については、第1次報告書を参照。）

父母の職業分布、年令、学歴構成、母親の雇用状況、家族構成、子どもの数の分布、調査対象児の兄弟姉妹の位置、所得分布の全体の状況についてと4つの地域の特性は、第1次報告書でのべられている。

ところで、4地域に対応させての子どもの生活実態については、時系列的に(1)登校前の朝の生活、(2)下校・帰宅後の夕食までの生活、(3)夕食から就寝までの夜の生活とそれぞれ特徴を第1次報告書で明らかにした。

本稿では、地域特性から、さらに、進めて、職業階層、母親の雇用状況、所得階層についてのクロス分析を行なった。子どもの生活実態を社会環境の中でとらえるために子どもの家庭状況をみていく基礎作業のためである。子どもの生活は、親の生活に大きく影響されていくが、それは、家庭状況の具体的な問題の中で現われてくるものである。子どもの発達保障にとって、社会的、家庭的な問題（社会的貧困の現象の把握必要）が大きな疎外要因になっているのである。「社会の底辺 層

に対する補償教育 (Compensation Education) の問題は、教育の機会均等の教育計画にとって、もっとも基本的なものである。なぜなら、社会的家庭的条件が劣っているものは、教育においてももっとも不利な条件を負っているからである。』^{註(1)}

本調査研究は、アンケートの解答によって統計処理したものであり、個々の家庭の具体的事例と子どもの生活実態を問題にしているわけではなく、あくまでも、それぞれの社会階層のもつ一般的傾向であり、子ども自身の具体的成長を保障していくための実態は、個々の事例に即して、面接調査を深めていかねばならない。面接調査を行なうにあたっても子ども自身の発達と社会環境の体系的な理論仮説が求められる。体系的仮説なくして、具体的に問題をみつめていくことができないからである。一般的傾向把握、具体的面接作業、観察、実践事例分析、理論の深化のくりかえしで研究過程が進んでいくのである。従って、本調査研究は、それらの研究のための予備的作業としての一般的な傾向把握にすぎない。

ところで、1980年の国際児童年事業として二つの立場の異なる大きな機関が子ども実態調査を実施した。それは、日教組、国民教育研究所「子ども生活環境調査」と総理府青少年対策本部「国際比較日本の子供と母親」である。^{註(2)}

総理府の調査では、10才から15才以下を対象にしており、その調査内容は、児童の就学状況、生活実態、児童の価値感・生活感、児童の人間関係、職業志望、などの児童側のものと、母親の子供のしつけ、子との人間関係、母親の社会観・人間観、等々多面的にわたっている。その中での児童の生活実態の調査の項では、就寝、起床時間、睡眠時間、学校での拘束時間、学校以外での勉強時間、遊んでいる時間、自由な時間の過ごし方、手伝い時間及び手伝い内容などを、わが国とフランス、韓国、タイ、イギリス、アメリカと国際比較している。

調査数は、各国とも、母子1,500組を原則として行なっている。

この調査結果より日本の子どもは、「勉強」を生活の中心に据えているとしている。「10才では、『勉強』がそれほど重圧とはなっていないため、長時間にわたって遊んでおり、手伝いもしているが、15才では『勉強』がかなり重圧となり、睡眠時間を割き、遊んでいる時間を割いて、その分勉強時間にまわしている」^{註(3)}

日教組の「生活・環境調査」では、子どもの生活リズムの乱れを問題にしている。「朝自分で起きれるか」「排便のリズムはどうか」「起床時の様子と学習意欲タイプ」などの調査を行なっている。そして、この調査結果の分析をつうじて、5つの提起を行なっている。

- ①早起き、早寝で生活リズムを
- ②からだづくりと生活全体の立て直しを
- ③実生活の体験でテレビ漬けの生活から抜け出す力を
- ④学校を子どもの生きがいに
- ⑤放課後の地域生活をゆたかに

ところで、毎年発刊されている日本子どもを守る会編「子ども白書」は、そのときどきの子ども

問題を新聞報道なども詳細に加えながら全体的に据えている。本稿の調査研究の問題意識整理のうえで参考にさせてもらった。^{註(4)}

本稿の社会階層なる概念は、社会科学的な階級・階層概念でなく、職業分類、母親の雇用状況分類、所得階層別による機能分類である。また、価値観や社会的威信などによる意識面からの社会階層規定をとっていない。社会階層を機能分類したことは、それが本来的目的でなく、本質的には階級関係をとらえて、その内容の重層的な階層とその構造を明らかにしなければならない。つまり、社会階層と子どもの生活実態を問題にしたことは、国家独占資本主義の蓄積構造における国民生活の実態の中での子どもである。本稿では、この課題は、直接的に対象外にしているが、その考察の展望をもつての社会階層と子どもの生活実態分析である。

注(1) 高山武志「アメリカの貧困児教育」北大教育学部紀要38号, 75頁

注(2) 総理府青少年対策本部編「国際比較日本の子供と母親——国際児童年記念調査最終報告書」, 日教組, 国民教育研究所「子ども生活環境調査」

注(3) 総理府青少年対策本部, 前掲報告書49頁

注(4) 日本子どもを守る会編「子ども白書」草土文化

その他参考文献

「日本の子ども」(ジュリスト増刊総合特集, 有斐閣, 1979年)

千石保, 飯長喜一郎「日本の小学生——国際比較でみる」日本放送出版協会

有地亨「フランスの親子, 日本の親子」日本放送出版協会

岩波講座子どもの発達と教育第1巻「子どもの発達と現代社会」岩波書店

NHK放送世論調査所「日本の子どもたち」1980・5

Philip Robinson "Education and Poverty" Methuen

1. 子どもの日常生活習慣と社会階層

本項では、子どもの日常生活習慣的行動の自立性を社会階層との関係で明らかにするものである。このために、日常生活習慣の項目として、「起床」(子のみ)「洗顔」(母子双方)「寝具のかたづけ」(子のみ)「身辺整理」(母子双方)の調査結果の分析を行なった。

「起床」の項目は、朝自分一人で起きれる子どもの実態であり、それは、1日の生活の自然的、生理的リズムの出発という視点から、とくに、この項目については、社会階層とのクロス分析だけでなく、子どもの精神的自立性の項目や生活時間の項目とのクロス分析を行なった。

「身辺整理」の項目は、母子双方からの解答のズレの問題も同時に明らかにした。子どもの生活の自立にとって、自分の部屋の掃除をしたり、机のまわりをかたづけたりするという身のまわりの整理が出来ることは、基本的生活習慣である。生活習慣上の自分のことは、自分でするという生活の自立性の分析は、本項の基本課題でもある。

1) 「起床」

朝起こされる子どもは、表(1)に示すように、職業別において、公務員の家庭が、相対的に高い。とくに、公務員の場合は、学年が上がるにつれて起こされる子どもが多くなっている。表(2)に示すように母親の雇用状況では、働いていない母親をもつ女の子が最も起こされる率が高い。学年が上がるにつれて、その差は著しく開いていく。例えば、中学3女子の場合、無職が32.5%、自営業が17.6%、雇用者が21.8%と大きく開いている。表(3)に示すように子どもの家庭の所得分布についての相関は、階層的に現われていない。

朝起こされる子どもは、勉強時間、就寝時間、登校までの朝の時間がどのようになっているのかということ、それらとのクロス分析を行なった。

表(1) 朝起こされる子どもの家庭の職業 %

	農 林	商業・サービス	技能労働者	一般事務	公務員
小学5	29.6	23.8	28.0	23.6	22.4
中学1	20.0	25.6	36.2	27.5	35.6
中学3	23.8	23.2	21.7	26.5	36.4

表(2) 朝起こされる子どもの母親の雇用状況 %

	自 営 業		雇 用 者		無 職	
	男 子	女 子	男 子	女 子	男 子	女 子
小学5	19.1	26.5	28.6	22.0	22.6	28.1
中学1	25.3	27.7	30.3	33.3	27.4	35.9
中学3	28.9	17.6	26.4	21.8	26.5	32.5

表(3) 朝起こされる子どもの家庭の所得分布 %

	250万以下	250～350万	350～450万	450～600万	600万以上
小学5	26.4	29.1	20.5	21.3	26.3
中学1	25.3	30.5	32.4	27.6	25.7
中学3	26.9	23.7	27.7	32.7	27.6

表(4)に示すように、勉強をしない子どもは、起こされる率が少なく、よく勉強する子どもは、起こされる率が高い。この傾向が顕著になるのは、中学3年である。表(5)に示すように、就寝時間と起こされる子どもの関係においても、11時、12時と遅く眠る子どもは、朝起こされる子どもになっている。表(6)に示すように、起こされる子どもは、学校に出かけるまでの時間もきわめて少ない。それらの子どもは、20分以下、20分～40分以下に集中している。学年が上がるにつれて、その傾向は強くなっていく。しかしながら、登校前の時間が20分以下しかない子どもの中で、自分ひとりで起きる子どもは、3割～4割存在しているのである。中学3年の場合、登校前の時間20分以下の子どもで「起こされる子ども」は24.8%であるが、ひとりで起きる子どもは、

表(4) 勉強時間ごとのひとりで起きる、起こされるの比率

%

		あまりしない	1時間以下	2時間以下	3時間以下	3時間以上
小 学 5	ひとりで起きる	31.6	29.7	34.9	32.6	35.0
	起こされる	26.3	24.1	22.1	32.6	35.0
中 学 1	ひとりで起きる	25.0	31.1	28.1	34.5	32.9
	起こされる	31.3	37.8	24.3	29.4	29.4
中 学 3	ひとりで起きる	39.5	41.6	40.6	31.8	33.3
	起こされる	17.3	18.2	22.1	31.1	30.0

註. 各学年のその他の項%省略

表(5) 就寝時間ごとのひとりで起きる、起こされるの比率

%

		9時以前	9～10時	10～11時	11～12時	12時以後
小 学 5	ひとりで起きる	49.1	33.7	31.8	18.4	—
	起こされる	22.6	18.5	29.0	38.8	—
中 学 1	ひとりで起きる	—	42.3	33.4	28.1	22.2
	起こされる	—	17.9	23.9	33.4	34.6
中 学 3	ひとりで起きる	—	50.0	43.1	34.2	29.3
	起こされる	—	24.0	17.8	26.8	31.2

註. 各学年のその他の項の%省略

表(6) 登校までの朝の時間ごとのひとりで起きる、起こされるの比率

%

		20分以下	20～40分	40～60分	60分以上
小 学 5	ひとりで起きる	39.9	31.2	23.8	44.1
	起こされる	21.6	23.8	29.3	21.5
中 学 1	ひとりで起きる	32.8	29.8	30.8	39.8
	起こされる	30.5	30.6	26.5	19.4
中 学 3	ひとりで起きる	40.1	27.7	37.4	53.8
	起こされる	24.8	30.5	22.5	19.3

註. 各学年のその他の項の%省略

40.1%となっている。就寝時間が12時以降でもひとりで起きれる子どもは、中学3年の場合、29.3%であり、起こされる子どもは、31.2%である。勉強時間についても、中学3年の場合は、3時間以上勉強する子どものひとりで起きる率は、33.3%であり、起こされる率は、30.0%とそれほど大差がない。つまり、これらの事実は、勉強時間の長さ、就寝時間の遅さ、登校までの時間の短かさが、かならずしも、起こされる子どもという意味でなく、あくまでも相対的に、自分ひとりで起きれる子どもの率が低いということを示しているのである。就寝時間が遅い、勉強時間が長い、登校までの時間が短い条件のもとで、自分ひとりで起きている子どもが多いことは、起こさ

れる子どもには、他の要因が絡んでいるのである。

朝起こされる子どもは、洗顔、寝具のかたづけ、勉強時間、自分の部屋の掃除などの身辺整理が、どのようになっているのだろうか。表(7)に示すように、洗顔はみがきなどの身体的な生活習慣については、朝起こされる子どもが、とくに、他の子どもに比して、とくに出来ていないという状況はなく、すべての学年についても全体の項目と同率を示している。勉強時間を決めていることについても起こされる子どもは、中学3年になると全体より高くなっている。これに反して小学5年の場合、起こされる子どもの勉強時間をきめている率は、逆に、全体より低くなっている。

寝具のかたづけや、自分の部屋の掃除などの身辺整理について、起こされる子どもは、全体に比して、著しく、出来ていない。つまり、自分の生活上の身辺整理について親に依存していることがいえるのである。

表(8)に示すように、「自分の気持ちをはっきりいえる」「人に迷惑なことはがまんする」「きれいな食べ物でもたべる」という精神的自立の状況は、全体として学年が上がるにつれて、できる子どもが少なくなっている。なかでも「きれいな食べ物でもたべる」子どもの比率は、極端に減少していている。その三項目ともひとりで起きれる子どもの方が相対的に出来ることを示している。

表(7) 起こされる子どもの生活習慣確立状況

%

	小 学 5	中 学 1	中 学 3
洗 顔	66.3 (62.0)	76.4 (75.5)	85.5 (85.5)
ふ と ん の し ま つ	28.7 (34.6)	27.9 (34.4)	35.6 (44.5)
勉強時間を決めている	19.9 (27.9)	40.3 (37.5)	27.9 (23.6)
部 屋 の 掃 除	27.6 (34.2)	34.3 (42.2)	44.7 (50.9)

註. () 内は、全体の子どものいつでもできている項の比率

表(8) 起床の自立性と精神的自立

%

		ひとりで 起きる	起こされる	全 体
自分の気持ちを はっきりいえる	小学5	48.2	40.3	45.6
	中学1	46.7	41.2	41.0
	中学3	46.7	44.2	41.9
人に迷惑がかからないように がまんする	小学5	56.3	45.3	52.9
	中学1	47.9	48.9	49.4
	中学3	45.3	39.9	42.5
きれいな食べ物も たべる	小学5	58.8	51.9	59.6
	中学1	47.5	39.9	43.2
	中学3	45.0	33.0	38.3

「きれいな食べ物でも食べる」ということは、中学3年の場合、ひとりで起きる子どもと起こされる子どもの差は、12%である。また、学年差でもひとりで起きる子どもでは、小学5年と中学3年の差が13.8%あり、起こされる子どもでは、小学5年と中学3年の差が18.9%と開くのである。

2) 「洗顔」

社会階層によって、毎朝、顔あらい、歯みがきをしている子どもは、同一でない。小学5年の段階において、いつも行なっている子どもは、全体として、62%であったが、農林業40.7%、母親が働きにでている男子41.1%、250万以下所得層55.2%と相対的に身体的自立のできない子どもが多い社会階層が存在する。中学1年になると、いつも行なっている率は、全体的に75.5%と高くなっていくが、これも小学5年と同様に、農林業、母親が働きに出ている男子、250万以下所得層の場合低くなっている。とくに、母親が働きに出ている男子は、60.5%と低くなっている。中学3年になっても、全体的には、85.5%といつもしている子どもの率は著しく高くなるが、農林業66.7%、母親が働きに出ている男子79.2%、250万以下所得層85.0%となっている。洗顔については、各学年とも男女の差が大きく、全般的に女子の方が、できている子どもが著しく高くなっているのである。例えば、母親が働きに出ている子どもについての男女の差をみれば、小学5年の場合、男子41.1%に対して、女子は、74.6%、中学1年の場合、男子の60.5%に対して、女子は、86.2%と大きく男女差を示している。女子は男子に比して、できる子どもの率は高くなっているが、女子のなかでも、母親が働きに出ている場合は低くなっている。ところで、母親が無職の女子は、小学5年85.4%、中学1年90.3%、中学3年97.4%と高率になっている。

表(9) 「洗顔」をいつもしている子どもの社会階層

%

	母親雇用者の男子	母親雇用者の女子	母親無職の女子	農 林 業	250万以下所得	全 体
小学5	41.1	74.6	85.4	40.7	55.2	62.0
中学1	60.5	79.4	90.3	75.4	67.5	75.5
中学3	79.2	86.2	97.4	79.4	85.0	85.5

3) 「寝具のかたづけ」「身辺整理」

表(10)に示すように、ふとんやねまきなどを自分でかたづける子どもは、全体的に学年が上がるにつれて比率が高まっていく。小学5年で、いつもしている子どもは、34.6%であるが、中学3年になると44.5%と上昇していく。しかし、社会階層によっては、その傾向は、必ずしも同一でない。

母親が自営している男の子どもは、小学5年の場合、いつもしているが26.6%であるけれども、中学3年になっても26.8%にすぎない。しかし、母親雇用の中学3年女子の場合、54.9%と高い比率を占めており、男女差が著しいことが現われている。小学5年段階において、いつもふとんのしまつや寝まきのかたづけを自分でしている子どもの多い社会階層は、公務員であり、その比率

表 (10) ふとんや寝まきなどを自分でいつもかたづけている子どもと社会階層 %

		農 林	商 業・ ビ サ ス	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	母 親 の 自 営 子	母 親 の 雇 用 子	母 親 の 無 職 子	母 親 の 自 営 子	母 親 の 雇 用 子	母 親 の 無 職 子	全 体
小 学	5	25.9	28.2	37.3	36.1	40.6	26.6	30.4	29.6	39.8	47.5	38.5	34.6
中 学	1	50.9	29.2	35.2	33.9	37.1	34.2	34.2	35.8	38.6	33.3	38.8	34.4
中 学	3	47.6	39.5	51.9	45.4	46.4	26.8	51.4	40.2	54.9	50.6	49.1	44.5

は、40.6%になっている。中学3年になって、いつもしている子どもの比率の高い職業階層は、農林業47.6%、技能労働者51.9%となっており、逆に、中学3年で、その比率の低いのは、商業・サービスの39.5%である。

表(11)に示すように、自分の部屋の掃除や机のまわりの整理などを、自分でいつもしている子どもは、前記の寝具のかたづけと同様に、学年が上がるにつれて比率は大きく高まっていくが、しかし、それほど比率の変化のない場合の階層をみることができる。公務員の小学5年の場合は、すでに、44.8%の子どもが、いつもしていると答えており、その学年で、最も実行している子どもの比率を高くしているが、しかし、中学3年の場合は、45.7%と最も低い階層になっている。これに反して、農林業の小学5年の場合、いつもしている子どもは、25.9%と最も低くなっているが、中学3年になると52.4%と著しく高くなっている。技能労働者も同様の傾向を示し、中学3年には、いつもしている子どもが55.7%と高率を示している。

母親の雇用状況については、男女差が著しくあり、いつもしている子どもの率が最も高いのは、母親自営業の女子である。これは、前記の寝具のかたづけと同様である。

ところで、母親との解答のズレは、どの学年、どの階層によっても大きく現われているが、全般的に子どもよりも厳しくみているのが特徴である。全体の項の中学3年の場合、子どもは、半数近くの50.9%がいつもやっていると答えているが、母親は、37.5%と答えている。この親子のズレの比率は、どの階層でも同じ位の割合で現われているが、相対的に、母親が無職の場合、その開き

表 (11) 自分の部屋の掃除や机のまわりの整理などをいつもする子どもと社会階層

		農 林	商 業・ ビ サ ス	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	母 親 の 自 営 子	母 親 の 雇 用 子	母 親 の 無 職 子	母 親 の 自 営 子	母 親 の 雇 用 子	母 親 の 無 職 子	全 体
小 学	5	25.9 (14.8)	29.1 (21.8)	31.4 (27.1)	36.8 (20.1)	44.8 (28.0)	26.6 (23.4)	26.8 (14.3)	27.0 (20.9)	36.1 (30.1)	40.7 (23.7)	44.8 (32.3)	34.2 (23.2)
中 学	1	52.8 (35.8)	47.0 (28.8)	41.9 (27.6)	40.9 (29.2)	37.9 (37.9)	41.8 (24.1)	27.6 (22.4)	40.6 (24.5)	55.4 (38.6)	47.6 (30.2)	39.8 (44.7)	42.2 (30.8)
中 学	3	52.4 (41.3)	53.1 (37.9)	55.7 (39.6)	48.6 (36.2)	45.7 (35.7)	39.2 (33.0)	43.1 (29.2)	34.3 (29.4)	68.6 (45.1)	59.8 (42.5)	59.6 (47.4)	50.9 (37.5)

註、()内は母親よりの解答

が減少している。例えば、中学3年の場合、母親無職の男子の差は4.3％、女子は7.2％であることから、全体の差の13.4％よりも低いことが明らかである。

2. 子どもの生活時間・リズムと社会階層

本項では、子どもの生活時間と生活リズムの問題と社会階層の関係を明きらかにする。生活時間では、寝就時間に焦点をあてた。登校前までの朝の時間の関係と朝の生活リズムの問題から出発させ、それらの問題を社会階層ごとに明きらかにした。そして、登校前までの朝の時間と就寝時間、さらに、前日の就寝時間とテレビの視聴時間、勉強時間のかかわりを階層的にどのように現われているのかを問題にした。さらに、子どもの勉強の問題を深めるために、勉強塾のことや勉強時間を決めていることについての階層的違いを明きらかにした。そして、勉強時間を決めていることが、子どもの精神的目立といかに関係しているかを明きらかにするために、「子どもの自分の気持の意志表明」「他人の意見をきく」「人に迷惑がかからないようにがまんする」項目とクロス分析を行なった。

1) 社会階層ごとの登校までの朝の時間と朝の生活リズム

表(12)に示すとおり、全般的に学年が上がるにつれて、登校までの朝の時間が40分以内の比率が減少していく。また、20分以内の比率も同様である。しかしながら、公務員の場合、中学3年の方が小学5年より11.3％と大きく、逆に増大している。

登校までの朝の時間が、40分以内である比率の高い階層は、商業・サービス業層と母親自営の男子層である。これに対して、比率の低い層は、農林業層である。中学3年では、公務員層と農林業層では、40分以内の項で、20％近くの差がある。農林業と商業・サービス業では、小学5年で16.4％の差、中学3年で15.2％の差がある。母親自営の男子の場合、農林業との差は、小学5年で17.9％、中学3年で16.8％である。20分以内でも、中学3年の場合、商業・サービス、公務員は、農林業との差が10％程存在する。つまり、農林業層は、他の階層と比して朝の時間に十分ゆとりがあるのである。

表(12) 社会階層ごとの子どもの登校前までの朝の時間40分以内の比率 %

	農 林	商 業・ サ ー ビ ス	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	母 親 の 男 子 自 営	母 親 の 雇 用 男 子	母 親 の 無 職 男 子	母 親 の 自 女 営	母 親 の 雇 用 女 子	母 親 の 無 職 女 子	全 体
小 学 5	55.5 (18.5)	71.9 (24.8)	63.6 (16.1)	67.3 (20.8)	58.0 (16.1)	73.4 (24.5)	62.5 (17.9)	56.5 (14.8)	63.9 (14.5)	64.4 (16.9)	62.5 (19.8)	65.2 (19.7)
中 学 1	52.8 (7.5)	66.7 (18.3)	64.8 (16.2)	65.5 (12.9)	58.4 (12.9)	72.1 (17.7)	64.5 (25.0)	67.0 (15.1)	56.5 (11.9)	54.0 (14.3)	61.1 (5.8)	64.1 (16.0)
中 学 3	49.2 (9.5)	64.4 (20.3)	55.7 (14.2)	59.5 (14.6)	69.3 (20.0)	66.0 (18.6)	55.0 (22.2)	56.9 (20.6)	62.7 (23.5)	56.3 (17.2)	61.4 (8.8)	61.3 (17.1)

註. () 内は登校前までの朝の時間20分以内

表 (13) 社会階層ごとの朝食をいつも食べている状況

%

		農 林	商 業・ サー ビス	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	母 親 の 男 子 自 営	母 親 の 雇 用 子	母 親 の 無 職 男 子	母 親 の 自 営 女 子
小 学	5	81.5	77.7	73.7	78.5	86.7	74.5	73.2	83.5	78.3
中 学	1	81.1	74.4	76.2	78.9	88.6	77.2	81.6	84.0	78.2
中 学	3	66.7	70.6	83.0	77.8	82.1	69.1	69.4	88.2	66.7
		母 親 の 雇 用 女 子	母 親 の 無 職 女 子	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小 学	5	88.1	88.5	78.2	77.2	81.1	80.9	80.7	79.2	
中 学	1	82.5	82.5	71.7	77.1	84.2	80.0	78.6	77.7	
中 学	3	79.3	79.8	76.2	72.7	80.7	75.5	70.7	74.7	

表 (13) に示すように、朝食をいつも食べている状況は、学年が上がるにつれて、全般的に減少している。食べている比率の高い層は、公務員、母親無職の男子、母親無職の女子、母親雇用の女子である。さらに、350万～450万の中間的な所得層も高くなっている。この高い層でも、女子の場合は、小学5年と中学3年の差が9%弱となっている。朝食を食べていないという女子の場合は、独自の問題が存在する。それは、家族での女子の年令が上がることで役割増大と女子自身の内的な問題があるのである。これに反して、母親無職の男子の場合は、5%弱と比率を高くしている。ここには、母親の男の子に対する保護の配慮が、学年が上がるにつれて強くなっていくことを示している。朝食をいつも食べている状況は、子ども側の問題ばかりではなく、母親側の生活リズムの問題も忘れてはならない。朝の時間のゆとりのない働いている母親の家族の場合の男子において、いつも食べている子どもの比率が顕著に低く現われている。女子の場合、母親が働いていても、男子に比して、朝食をたべていく比率が高いのは、子ども自身が母親の手伝いや自分で食事の準備をするためとみられる。

前記に示したように、農林業の子どもは、朝の時間に余裕があり、登校前まで、40分以上ある子どもが中学3年では、半数以上を占めている。しかし、中学3年になると、朝食をいつも食べる子どもの比率が著しく低くなることは、登校前までの絶対的時間の短かさだけの問題からでは朝食抜きを説明できないことは明らかなである。公務員の中学3年は、40分以内、20分以内の比率が高く、余裕のない朝であるが、朝食をいつも食べている子どもは非常に高かったのである。

朝の排便の生活リズムについては、男女差が大きくみられるが、しかし、社会階層ごとの傾向はみられない。朝の排便については、子ども自身の内的な問題に大きく左右されるとみられる。

登校前までの朝の時間と就寝時間のクロスをした表 (14) より、小学5年の場合、10時以前の就寝時刻の子どもは、登校までの各時間毎にそれほど大きな違いがなく、それぞれ50%代であり、最高と最低の比率は、5%も差がないほど接近している。10時から11時就寝時刻についても同様

表(14) 登校までの朝の時間ごとの就寝時刻の比率

%

登校までの朝の時間 就寝時刻		20分以下	20～40分	40～60分	60分以上	全 体
小学5	10時以前 {	56.8 (8.8)	55.0 (5.6)	52.5 (4.9)	54.9 (14.0)	54.9
	10～11時	35.8	36.8	40.2	40.9	37.8
	11～12時	6.1	7.4	6.7	4.3	6.7
	12時以降	1.4	0.6	—	—	0.4
中学1	10時以前	10.7	9.6	13.0	13.6	11.1
	10～11時	41.2	40.2	35.1	44.7	39.5
	11～12時	35.1	41.2	42.2	31.1	39.0
	12時以降	13.0	8.8	9.7	10.7	9.9
中学3	10時以前	3.6	6.0	8.0	16.8	7.7
	10～11時	20.4	19.5	21.4	31.1	21.6
	11～12時	33.6	38.4	39.0	33.6	36.7
	12時以降	42.3	36.2	31.0	18.5	33.1

註. 小5の()内は9時以前

である。そして、この2つの時間帯にほとんどの子どもが就寝している。つまり、小学5年の場合は、登校前までの朝の時間の余裕と就寝時間と直接的に関係を持っていないのである。早く寝た子どもが、朝の時間が十分あるということになっていないのである。このことは、中学1年についても同様のことがいえる。60分以上ある子どもと、20分下しかない子どもとそれぞれの就寝時刻帯の比率の差は、4%以内ということに近似しているのである。

しかし、中学3年になると状況は著しく異なり、登校前までの時間が20分しかない子どもの就寝時刻が、遅くなるほど比率が大きく、12時以降が42.3%である。中学3年になると早く寝た子どもは、朝の時間に余裕をもっているのである。登校前までの時間60分以上ある子どもは、11時以前に47.9%寝ている。20分以下しかない子どもは、11時以前に寝る比率を24%しか示していない。

中学3年になっても、早寝する子どもが登校前までの時間が20分しかないのが約4分の1を占めていることも重要なことである。つまり、中学3年でも、就寝時間と直接に関係をもっていない別の理由による朝の時間に余裕のない子どもがいるからである。

2) 「就寝時刻」

表(15)に示すように、12時以降の就寝の比率が高い階層では、公務員、無職母親の男子、600万以上の所得層になっている。それらの層は、全体の比率よりも約10%前後の差をもっている。これと反対に、12時以降の就寝の子ども比率の少ないのは、農林業、自営母親の男子、250万以下所得層となっている。表(16)は、就寝時刻ごとに3時間以上の勉強をしている子どもの比率をみたものであるが、この表より、中学3年の場合、就寝時刻の遅い子どもは、長時間の勉強をしている比率が高いのである。12時以降の就寝時刻になれば、3時間以上勉強が30.1%であり、2時

表 (15) 社会階層に対応した中学3年の子どもの就寝時刻

	農 林 業	商 工 業・ ビ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 男 子 母 親	雇 用 の 男 子 母 親	無 職 の 男 子 母 親	自 営 の 女 親
9時以前	1.6 (1.6)	1.1 (0.6)	2.8 (0.9)	— (—)	1.4 (0.7)	1.0 (1.0)	— (—)	2.0 (—)	2.0 (—)
9～10時	14.3 (17.5)	4.0 (7.9)	14.2 (8.5)	5.4 (7.0)	2.9 (7.1)	10.3 (13.4)	9.7 (15.3)	1.0 (4.9)	5.9 (7.8)
10～11時	30.2 (44.4)	23.7 (33.3)	22.6 (45.3)	20.5 (29.2)	13.6 (21.4)	33.0 (46.4)	26.4 (30.6)	17.6 (22.5)	14.7 (27.5)
11～12時	36.5 (27.0)	32.8 (37.3)	37.7 (30.2)	38.9 (43.8)	39.3 (50.0)	32.0 (30.9)	25.0 (37.5)	34.3 (46.1)	48.0 (46.1)
12時以降	15.9 (7.9)	38.4 (16.4)	22.6 (13.2)	34.6 (18.4)	41.4 (18.6)	22.7 (6.2)	36.1 (13.9)	44.1 (23.5)	29.4 (15.7)
	雇 用 の 女 親	無 職 の 女 親	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～ 700万	全 体	
9時以前	2.3 (1.1)	0.9 (1.8)	2.5 (0.6)	1.4 (1.4)	0.8 (0.8)	0.9 (0.9)	— (—)	1.4 (0.6)	
9～10時	4.6 (3.4)	3.5 (5.3)	12.5 (16.2)	7.9 (6.5)	5.9 (6.7)	1.8 (3.6)	1.7 (5.2)	6.3 (8.9)	
10～11時	16.1 (31.0)	19.3 (28.1)	31.3 (45.0)	23.0 (37.4)	18.5 (33.6)	10.0 (13.6)	17.2 (19.0)	21.6 (32.5)	
11～12時	41.4 (44.8)	38.6 (43.0)	31.3 (26.9)	37.4 (38.8)	38.7 (37.8)	48.2 (64.5)	34.5 (53.4)	36.7 (39.5)	
12時以降	34.5 (17.2)	36.8 (20.2)	21.9 (9.4)	30.2 (14.4)	33.6 (18.5)	39.1 (15.5)	43.1 (20.7)	33.1 (15.9)	

註. () 内は母親の解答

間～3時間は37.0%となるのである。小学5年の場合でも、11時から12時に就寝する子どもは、3時間以上勉強している子どもが12.2%あり、2時間～3時間は24.5%となるのである。中学3年ほどではないが、小学5年でも、就寝時刻の遅さと長時間の勉強の関係がみられるのである。これとは逆に、早い就寝時刻の場合の子どもは、勉強時間が少ないのである。中学3年の場合で、10時から11時に就寝する子どもは、3時間以上の勉強をしている比率1.7%、2時間～3時間は21.3%にすぎないのである。

表 (17) より、テレビの視聴時間との関係をみれば、小学5年の場合、就寝時刻の遅い子どもは、長時間視聴している率の高いことが見られるが、中学では低くなっていく。

中学3年での公務員、無職母親の男子、600万以上所得層の子どもの就寝時刻がきわめて遅いの

表 (16) 就寝時刻ごとの3時間以上勉強する子どもの比率 %

	9時以前	9～10時	10～11時	11～12時	12時以降
小学5	— (13.2)	0.3 (7.9)	4.6 (15.9)	12.2 (24.5)	— (—)
中学1	8.3 (33.3)	3.8 (26.9)	9.8 (37.4)	29.4 (41.6)	49.4 (37.0)
中学3	18.2 (18.2)	4.0 (20.0)	1.7 (21.3)	11.2 (47.1)	30.1 (41.4)

註. () 内は2時間から3時間の勉強時間

表 (17) 就寝時刻ごとの3時間以上テレビをみる子どもの比率 %

	9時以前	9～10時	10～11時	11～12時	12時以降
小学5	3.8	21.1	23.3	36.7	50.0
中学1	8.3	14.1	17.2	10.6	17.3
中学3	9.1	20.0	21.3	8.5	6.8

は、勉強時間との関係が大きいと見られる。それらの階層は、母親の解答では、子どもとのズレがでている。公務員の場合は、22.8%の差、無職母親の男子の場合は20.6%の差、600万以上所得層は22.4%の差と大きな解答の差がある。この解答の差は、他の階層にも同じように生じているのである。つまり、母親の方が子どもの就寝時刻を早くみているのである。

3) 「テレビ視聴時間」

表 (18) に示すように、長時間のテレビの視聴時間は、一部を除いて全般的に、どの階層とも学年が上がるにつれて、少なくなっている。小学5年において、3時間以上の長時間視聴の子どもの多い階層は、技能労働者32.2%、雇用母親の男子41.1%である。1時間以下の子どもの比率の多い階層は、農林業、公務員、無職母親の男子と女子、600万以上所得層である。農林業は別として、これらの階層は、子どもの面倒をみれる母親達が多い層である。小学5年の場合、テレビに子守りをさせなければならない状況は、雇用母親の男子に最も高く、この層の1時間視聴時間は、わずか5.4%にすぎない。2時間以上のテレビの視聴の比率になると約7割近くを占めている。しかし、この層も学年が上がるにつれて、視聴率がさがってくる。中学3年の場合、雇用母親の男子で、3時間以上のテレビ視聴の子どもの比率は、15.3%と急激に減少している。これに反して、農林業でのテレビの長時間視聴の子どもの比率は、学年が上がるにつれても大きな変化はなく、中学3年では、他の階層にくらべて3時間以上の視聴が最も高い率になっている。この傾向は、所得250万以下層についても同様なことがいえるのである。

中学3年の場合で、1時間以下のテレビ視聴が最高いのは、公務員43.6%、無職母親の女子37.7%、600万以上所得層43.1%であり、それらの層は、3時間以上の視聴は、著しく少なく、

表(18) テレビの視聴時間と社会階層

		農 林 業	商 工 業・ ビ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親	雇 用 の 母 親	無 職 の 母 親	自 営 の 母 女 親
小学5	1時間以下	25.9	17.5	15.2	20.9	25.9	12.8	5.4	25.3	30.1
	1～2時間	33.3	28.2	26.3	42.4	34.3	37.2	25.0	30.4	26.5
	2～3時間	22.2	28.2	23.7	18.8	23.1	26.6	28.6	19.1	22.9
	3時間以上	18.5	24.8	32.2	16.7	14.0	22.3	41.1	21.7	20.5
中学1	1時間以下	5.7	19.6	22.8	29.8	43.2	12.7	22.4	34.9	26.7
	1～2時間	35.8	38.8	43.8	38.0	36.4	29.1	34.2	44.3	35.6
	2～3時間	32.1	21.5	19.0	17.5	12.1	34.2	13.2	12.3	22.8
	3時間以上	24.5	17.8	13.3	10.5	3.0	19.0	25.0	5.7	14.9
中学3	1時間以下	11.1	16.4	18.9	34.1	43.6	11.3	27.7	31.4	27.4
	1～2時間	33.3	44.1	43.4	31.9	35.0	44.3	25.0	37.3	33.3
	2～3時間	33.3	24.9	24.5	24.9	14.3	25.8	29.2	19.6	26.5
	3時間以上	20.6	13.6	12.3	8.1	5.7	17.5	15.3	10.8	12.7
		雇 用 の 母 女 親	無 職 の 母 女 親	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 以上	全 体	
小学5	1時間以下	22.0	26.1	16.7	15.8	21.3	23.4	26.3	20.0	
	1～2時間	45.8	38.5	28.7	33.1	31.1	36.2	31.6	33.4	
	2～3時間	18.6	20.8	25.3	26.8	21.3	23.4	26.3	23.2	
	3時間以上	11.9	11.5	25.3	23.6	26.2	16.0	12.3	21.6	
中学1	1時間以下	20.7	38.9	15.1	22.9	37.4	39.1	32.8	26.9	
	1～2時間	38.1	33.0	32.3	42.4	31.7	36.2	47.1	35.7	
	2～3時間	25.4	20.4	31.3	20.3	14.4	12.4	8.6	20.5	
	3時間以上	12.7	6.8	19.2	11.0	11.5	9.5	11.4	14.0	
中学3	1時間以下	31.0	37.7	12.5	26.7	29.4	39.1	43.1	25.5	
	1～2時間	40.2	36.8	35.6	39.6	39.5	37.3	36.2	37.5	
	2～3時間	17.2	19.3	31.3	25.2	19.3	16.4	12.1	24.4	
	3時間以上	8.0	4.4	20.0	7.2	8.4	7.3	5.2	11.2	

公務員 5.7 %, 無職母親の女子 4.4 %, 600 万以上所得 5.2 % となっており, 農林業や所得 250 万以下層と比べると 15 % 程の差をもっているのである。

4) 「勉強時間と学習習慣」

表(19)に示すとおり、子どもの勉強時間の傾向は、社会階層ごとに、また、学年によって異なっている。全体的には、中学1年になると勉強時間が著しく伸び、中学3年になると勉強をする子どもとしない子どもと大きく分かれていく。中学1年で勉強1時間以下の子どもの比率は、わずか7.5%にすぎなかったが、中学3年になると19.6%と増大している。また、3時間以上勉強する子どもの比率も中学1年では20.7%占めていたものが、中学3年になると15.0%と低下している。

のである。しかし、母親からみた子どもの勉強時間の解答において、勉強時間1時間以下は、中学1年で16.2%，中学3年で14.6%と減少しており、また、3時間以上の勉強時間も、中学1年で6.4%，中学3年で9.4%となっている。母親自身は、中学3年になると子どもは、勉強時間を増やしていると思っている傾向がある。そして、中学生をもつ母親は、子どもよりも勉強時間の量を低くみている。

小学5年で、勉強時間が1時間～2時間が50.5%と半数を占め、1時間以下が33.2%である。中学1年、3年よりも子どもと母親の解答のズレは大きくなく、7%を越えるものはない。中学1年で母親のみる子どもの勉強時間は、1時間～2時間が49.3%と半数近くを答えており、小学5年のときのと、この時間帯の比率は、変わっていない。小学5年のときと比べて、1時間以下の勉強時間の子どもが半分位に減少し、また、母親からみると、2時間から3時間の勉強する子どもの比率がその部分だけ増大している。中学1年になって、子どもが最も勉強時間を伸ばしている状況を母親はみれていないのである。

子どもの勉強時間を考えていくうえで、学年によって以上のような特徴をもっているが、社会階層ごとにはいかなる傾向をもっているのだろうか。

小学5年において、2時間～3時間帯の勉強時間の比率の高い社会階層は、公務員18.2%，無職母親の女子17.7%，350万～450万の所得層19.7%である。中学生になって、3時間以上勉強する子どもの比率の多い層は、中学1年の場合、雇用母親の男子23.7%，一般事務25.7%，無職母親の女子25.2%，350万～450万所得層25.2%，450万～600万層27.6%であり、中学3年の場合では、雇用母親の男子と一般事務の層が著しく比率を低下させ、無職母親の男子が増大している。また、公務員も他の階層に比して相対的に3時間以上勉強する子どもの比率を高くしている。無職母親女子、350万～450万と450万～600万の所得も中学1年と同様に3時間以上勉強する子どもの比率が高い。

雇用母親の男子は、中学1年において、1時間以下の比率が10.5%と他の階層に比して高い。この層の母親は、1時間以下しか勉強しないとみている比率を子ども以上に高くしており、この差は15%近くもある。そして、3時間以上の勉強の比率でも、17%も開きをもっている。中学3年になっても、3時間以上勉強していると答えた母親は、わずか1.4%にすぎない。子どもの解答は、13.9%であった。さらに、小学5年での雇用母親の男子の勉強時間を1時間以下と答えているのは、53.6%である。ここでも、子どもとの解答の差は、20%近くもある。雇用母親は勉強時間について子どもと大きなズレをもっているのである。

自営母親の男子は、あまり勉強していない子どもの比率は、小学5年から中学3年まで、他の階層に比して高くなっているが、母親との解答のズレは大きくない。小学5年の場合、1時間以下の解答を子どもは、44.7%としており、母親とのズレは4%程度にすぎない。中学3年でも、1時間以下の解答をしているのは、子どもが26.8%であり、母親とのズレは、5%にすぎない。これらと同じ傾向をもっているのは、250万以下の所得層である。1時間以下の勉強時間の子どもは、

表 (19) 社 会 階 層 ご と の

		農 林 業	商 業・ ビ ジ ネ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親	雇 用 の 母 親	無 職 の 母 親
小 学 5	1 時 間 以 下	29.6 (44.4)	34.9 (40.8)	38.1 (44.9)	35.4 (36.1)	23.1 (30.1)	44.7 (48.9)	33.9 (53.6)	24.4 (39.1)
	1 時間～ 2 時間	59.3 (51.9)	50.5 (50.5)	49.2 (45.8)	50.0 (59.7)	52.4 (60.8)	38.3 (44.7)	53.6 (39.3)	58.3 (53.0)
	2 時間～ 3 時間	7.4 (3.7)	11.7 (6.3)	9.3 (6.8)	11.8 (3.5)	18.2 (7.7)	12.8 (4.3)	12.5 (3.6)	10.4 (5.2)
	3 時 間 以 上	— (—)	1.5 (0.5)	2.5 (—)	2.8 (—)	4.2 (—)	1.1 (—)	— (—)	4.3 (—)
中 学 1	1 時 間 以 下	9.4 (18.9)	8.2 (16.4)	8.6 (21.0)	7.0 (17.0)	3.0 (8.3)	9.6 (24.1)	10.5 (25.0)	7.5 (15.1)
	1 時間～ 2 時間	32.1 (52.8)	31.5 (49.8)	33.3 (49.5)	32.2 (45.6)	25.0 (50.8)	34.2 (48.1)	25.0 (51.3)	29.2 (45.3)
	2 時間～ 3 時間	41.5 (22.6)	37.0 (25.6)	38.1 (23.8)	32.7 (24.6)	49.2 (31.8)	35.4 (21.5)	39.5 (17.1)	40.6 (31.1)
	3 時 間 以 上	17.0 (1.9)	21.5 (5.0)	18.1 (5.7)	25.7 (9.4)	21.2 (7.6)	20.3 (5.1)	23.7 (6.6)	19.8 (5.7)
中 学 3	1 時 間 以 下	39.7 (27.0)	20.9 (13.0)	22.6 (16.0)	11.3 (11.9)	14.3 (7.9)	26.8 (21.6)	16.6 (9.7)	8.8 (6.9)
	1 時間～ 2 時間	31.7 (49.2)	30.5 (39.0)	28.3 (50.9)	27.0 (34.1)	22.1 (34.3)	30.9 (38.1)	27.8 (51.4)	22.5 (38.2)
	2 時間～ 3 時間	19.0 (19.0)	35.0 (31.1)	40.6 (25.5)	42.7 (41.1)	41.4 (41.4)	34.0 (27.8)	37.5 (30.6)	38.2 (35.3)
	3 時 間 以 上	6.3 (3.2)	13.6 (9.6)	8.5 (5.7)	17.8 (9.7)	20.0 (15.0)	7.2 (6.2)	13.9 (1.4)	29.4 (16.7)

註. () 内は、母親の解答

わからない、解答なしの項の％は省略子供 1 時間以下の数字には、勉強をあまりしないも含む

小学 5 年で 41.4 % (母親とのズレ 0.6 %), 中学 3 年で 26.3 % (母親とのズレ 0.1 %) である。

勉強する時間が他の階層に比して多い中学 3 年の公務員の場合は、母親とのズレは大きくない。中学 3 年の 3 時間以上勉強する無職母親の男子の場合は、母親が厳しくみており、12.7 % の解答の差が出ている。

農林業の中学 3 年は、1 時間以下しか勉強しない子どもの比率が 39.7 % と著しく高い。とくに、この中で「勉強をあまりしない」と答えている子どもが 23.8 % も占めている。さらに、3 時間以上勉強する子どもの比率は、6.3 % にすぎない。ところが、中学 1 年では、「勉強をあまりしない」

子 ども の 勉 強 時 間 の 比 率

%

自 営 の 母 女 親 子	雇 用 の 母 女 親 子	無 職 の 母 女 親 子	250万以下	250万 } 350万	350万 } 450万	450万 } 600万	600万以上	全 体
31.3 (39.8)	33.9 (28.8)	27.1 (30.2)	41.4 (40.8)	41.8 (40.9)	28.7 (39.3)	20.2 (29.8)	26.3 (35.1)	33.2 (39.4)
51.8 (53.0)	49.2 (61.0)	52.1 (62.5)	43.1 (51.7)	49.6 (52.8)	44.3 (52.5)	59.6 (60.6)	56.1 (61.4)	50.5 (53.3)
12.0 (7.2)	11.9 (10.2)	17.7 (6.3)	10.3 (4.0)	8.7 (5.5)	19.7 (6.6)	14.9 (8.5)	12.3 (1.8)	12.4 (5.4)
3.6 (ー)	5.1 (ー)	2.1 (ー)	4.0 (ー)	— (ー)	4.1 (ー)	4.3 (1.1)	3.5 (ー)	2.7 (0.1)
6.0 (14.9)	7.0 (9.5)	2.0 (4.9)	10.1 (23.2)	3.4 (14.4)	6.4 (14.4)	5.7 (8.6)	8.6 (15.7)	7.5 (16.2)
31.7 (50.5)	41.3 (61.9)	31.1 (49.5)	36.9 (43.9)	30.5 (52.5)	31.7 (51.1)	27.6 (55.2)	25.7 (44.3)	32.5 (49.3)
38.6 (28.7)	36.5 (19.0)	40.8 (35.9)	34.8 (22.2)	40.7 (23.7)	33.8 (26.6)	39.0 (27.6)	48.6 (35.7)	37.7 (25.4)
20.8 (4.0)	14.3 (7.9)	25.2 (7.8)	18.2 (7.1)	22.9 (7.6)	25.2 (4.3)	27.6 (7.6)	15.7 (2.9)	20.7 (6.4)
34.3 (25.5)	20.6 (12.6)	11.4 (7.9)	26.3 (26.2)	20.2 (16.5)	13.5 (10.1)	15.4 (10.9)	6.9 (5.2)	19.6 (14.6)
28.4 (42.2)	25.3 (39.1)	21.9 (31.6)	30.0 (43.1)	28.8 (35.3)	29.4 (34.5)	20.0 (31.8)	31.0 (37.9)	27.0 (38.7)
30.4 (20.6)	39.1 (37.9)	46.5 (46.5)	32.5 (22.5)	36.0 (33.8)	38.7 (41.2)	41.8 (43.6)	43.1 (32.8)	37.2 (33.2)
6.9 (5.9)	13.8 (6.9)	19.3 (12.3)	9.4 (5.0)	15.1 (11.5)	16.0 (10.1)	21.8 (10.9)	15.5 (20.7)	15.0 (9.4)

と答えたものは、わずか1.9%であり、3時間以上勉強していると答えている子どもは、17.0%存在するのである。つまり、農林業の子どもは、受験をひかえる中学3年になると勉強をあきらめてしまう率を高くしているのである。農林業の小学5年の場合、1時間以下しか勉強しない率は、29.6%であり、公務員に比しても6.5%多かったにすぎない。農林業の場合は、勉強時間1時間以下の比率は、小学5年よりも中学3年の方が10%程高くなっているのである。

表(20)に示すように、勉強塾に通っている子どもは、全体としてみると、小学5年と中学3年と大きな差はない。しかし、階層的にみると決してそうではない。公務員の場合、小学5年で通塾

表(20) 社会階層ごとの勉強塾に通っている比率

%

			農 林 業	商・ビ 業・ス ・サ業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 男 子 親	雇 用 の 男 子 親	無 職 の 男 子 親	自 営 の 女 子 親
小	学	5	14.8	32.0	27.1	22.2	25.2	26.6	21.4	28.7	31.3
中	学	1	15.1	26.9	16.2	25.7	25.0	27.8	18.4	29.2	23.8
中	学	3	12.7	33.9	17.0	31.4	42.1	24.7	27.8	30.4	35.3
			雇 用 の 女 子 親	無 職 の 女 子 親	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小	学	5	27.1	25.0	25.9	17.3	34.4	25.5	36.8	26.0	
中	学	1	19.0	25.2	17.2	22.9	21.6	30.5	31.4	23.2	
中	学	3	23.0	30.7	13.7	27.3	38.7	45.5	48.3	29.7	

の率は、25.2%であったが、中学3年では42.1%と急上昇している。同じように、600万以上所得層も、小学5年の36.8%から中学3年には、48.3%と急上昇している。これとは逆に、小学5年の方が通塾率の高い階層として農林業、技能労働者、雇用母親の女子、250以下所得層と存在する。例えば、250万以下所得層の通塾率は、小学5年25.9%と全体の率の26.0%とほぼ同じ率を占めていたが、中学3年では、13.7%と半数近くに減っているのである。中学3年になって通塾率の低い階層は、受験にひかえて勉強をあきらめてしまう率の高い層と一致しているのである。

表(21)に示すとおり、勉強時間を決めている子どもの比率の高い階層は、公務員、無職母親の男子、450万～600万と600万以上の所得層である。小学5年と中学3年と比較すると、どの階層とも全般的に勉強時間を決めている率は中学3年の方が低くなっている。しかし、公務員の場合、中学3年でも小学5年よりも勉強時間を決めている子どもの比率が高くなっている。

勉強時間を決めている子どもの比率の高い学年は、どの階層とも中学1年である。中学1年の公務員や無職母親の男子の場合、半数以上の子どもが勉強時間を決めていると答えている。農林業でも中学1年の場合は、35.8%の子どもが勉強時間を決めていると答えている。中学3年において、決めている比率の低い階層は、農林業15.9%と250万以下所得層14.4%である。

小学5年で勉強時間を決めている比率の低いのは、農林業14.8%、250万以下18.4%、雇用母親の男子12.5%であるが、雇用母親の男子の場合、農林業、250万以下所得と異なって、中学3年では、勉強時間を決めているのが、30.6%と比率を高くしている。

勉強時間を決めている子どもの精神的自立の状況を見るために、「勉強時間を決めている」子どもが、「他人の意見を聞く」「人に迷惑をかけないようにがまんする」「自分の意志を表明する」という比率がどうなっているのかをクロス分析したのが表(22)である。この表より、三つの項目とも勉強時間を決めている子どもの方が精神的自立状況の比率を高くしている。とくに、「人に迷惑をかけないようにがまんする」ことに、大きな差が出ている。

表(21) 社会階層ごとの勉強時間を決めている子どもの比率

%

		農 林 業	商 工 業・ ビ ス ネ ス	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親	雇 用 の 母 親	無 職 の 母 親	自 営 の 女 親
小 学	5	14.8	23.8	22.9	28.5	35.0	26.6	12.5	32.2	26.5
中 学	1	35.8	35.6	36.2	33.3	52.3	38.0	40.8	51.9	40.6
中 学	3	15.9	17.5	17.0	24.3	40.7	21.6	30.6	35.3	19.6
		雇 用 の 女 親	無 職 の 女 親	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小 学	5	28.8	33.3	18.4	22.0	29.5	40.4	35.1	27.9	
中 学	1	28.6	40.8	29.3	36.4	42.4	47.6	42.9	37.5	
中 学	3	20.7	22.8	14.4	20.9	26.1	33.6	32.8	23.6	

表(22) 勉強時間を決めている子どもの精神的自立状況の率

%

		勉強時間を 決めている (A)	勉強時間を 決めていない (B)	A—B
他人の意見を聞く子ども	小学5	38.6	28.2	10.4
	中学1	43.2	29.9	13.3
	中学3	41.3	31.6	9.7
人に迷惑をかけないようがまんする	小学5	66.7	46.5	20.2
	中学1	54.8	45.0	9.8
	中学3	56.6	36.8	19.8
自分の意志を表明する	小学5	30.9	23.7	7.2
	中学1	32.3	19.6	12.7
	中学3	30.7	29.6	1.1

3. 子どもの生活にみる親子関係と社会階層

本項では、子どもの生活における親子の接触の問題を明らかにする。まず、はじめに、生活にみる親子のズレを問題にする。次に、夕食時の会話の重要性において、テレビが大きな阻害要因になっていないかという問題意識から「夕食を食べながらのテレビ視聴」の状況をそれぞれの社会階層ごとに明らかにした。そして、さらに、「夕食を家族そろってするか」「夕食の時刻を決めているか」という問題を「家族のだんらん」状況として社会階層ごとに分析した。

父親の仕事が子どもが理解しているかどうかは、子ども自身の内的な父親像にとって重要なことである。このため、子どもへの質問の「お父さんがどんなしごとをしているか知っているか」という項目を社会階層に対応させて分析した。さらに、親子のコミュニケーションが具体的な内容をもってどのように行なわれているかを知るために、親への質問としての「テストの成績をいつもみせているか」「友だちのことを話すか」「自分の悩みを話すか」ということをそれぞれの社会階層に対

応させて分析した。本項の最後に小使いと子どものねだりの問題を明きらかにした。

1) 生活にみる親子のズレ

生活にみる親子のズレの問題を明きらかにするために、「身辺整理」「外出時の連絡」「就寝時間」「勉強時間」の親子のズレを同一の家庭の親子についてのクロス分析を行なった。

表(23)に示すように、「身辺整理」について、母親の「いつもする」の解答については、それほど子どもとのズレをみせていないが、「ほとんどしない」と思っている親について、子どもは、いつも「している」か「ときどきはしている」と考えているのである。「身辺整理」の親子のズレについては、学年差の大きな違いをみせていない。

表(24)に示すように、「外出時の連絡」の親子のズレは、「いつもいう」という解答では最も少なくなっているが、しかし、過半数程度しか親子の一致をみない。学年差では、中学3年の方が小学5年よりも13.9%低く、不一致がふえている。その不一致は、「きかれたらいう」項目に多く、集中しており、極端なズレでは必ずしもないとみられる。

「ほとんどいわない」と母親が考えている家庭は、不一致が拡大しており、「だいたいう」と思っている子どもの比率が小学5年の2割5分から中学3年の2割と一定の割合で存在している。また、「ほとんどいわない」と答える母親の家庭で、中学1年では9.5%、中学3年では、8.3%の割合で、子どもの方は「いつもいう」とする親子の大きなズレが存在する。

表(23) 「身辺整理」についての母親の解答ごとに対応する子どもの比率 %

母親の解答 子ども	い つ も す る			と き ど き			ほ と ん ど し な い		
	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3
す る	65.9	66.8	74.2	26.8	35.0	37.7	14.1	10.2	22.1
と き ど き	31.8	27.7	20.3	55.2	47.5	44.9	34.8	46.6	36.8
あ ま り し な い	2.3	4.0	4.0	13.7	14.9	14.8	37.0	27.3	33.8
し て も ら う	—	0.8	0.7	3.6	1.7	2.1	14.1	14.8	7.4

註. 解答なし%省略 黒枠内は一致する数値

表(24) 「外出時の連絡」についての母親の解答ごとに対応する子どもの比率 %

母親の解答 子ども	い つ も い う			だ い た い い う			た ず ね た ら い う			ほ と ん ど い わ な い		
	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3
い つ も い う	57.2	49.8	43.3	25.0	20.8	14.4	13.4	6.4	5.0	6.3	9.5	8.3
だ い た い い う	31.4	31.9	34.5	45.2	50.7	43.8	32.0	25.5	35.0	25.0	23.8	20.8
き か れ た ら い う	10.0	15.8	16.7	25.0	23.8	33.9	41.2	53.2	55.0	50.0	23.8	29.2
い わ な い	1.5	1.5	4.2	4.2	4.4	7.5	12.4	12.8	5.0	18.8	42.9	41.7

註. 解答なし%省略 黒枠内は一致する数値

表(25)に示すとおり、「勉強時間」の親子のズレは、1時間以下、1時間～2時間と答える母親に多くみられる。勉強1時間以下では、中学1年で最も不一致が大きい。母親は1時間と考えていることに、子どもが一致するのは、わずか26.1%である。子どもの側は、2時間以下40.3%、3時間以下24.6%とその認知のズレは大きい。中学3年でも、母親が1時間以下と答えているのに子どもは、3時間以下の勉強をしていると思っている率が14.5%もある。

3時間以上の勉強をしていると思っている母親は、子どもとの一致を他の時間帯の解答に比して比率を高くしているが、しかし、中学3年において、母親よりも勉強時間を少なくみている子どもが4割近くも存在することは注目に値することである。全般的に母親の方が、子どもの勉強時間を少なくみている中でのことであるからである。母親が3時間以上勉強をしていると思っているのに、子どもは、1時間～2時間とするものが8%、1時間以下とするものが4%存在するのである。この傾向は、母親が、2時間～3時間勉強していると答えている場合には存在する。つまり、すべてにおいて、母親の方が勉強時間について厳しくみているといえないのである。あくまでも、母親が厳しく勉強時間をみているのは相対的なものである。

表(26)に示すように、就寝時刻は一般に学年差があるとみられる。小学5年では、9時～11時の間の就寝が多く、子どもの解答からみれば、その時間に87.6%集中している。この時間にお

表(25)「勉強時間」についての母親の解答ごとに対応する子どもの比率 %

母親の解答 子ども	1時間以下			1～2時間			2～3時間			3時間以上		
	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3
あまりしない	8.9	6.0	32.5	2.0	1.7	7.1	—	—	4.1	—	—	2.7
1時間以下	46.6	20.1	27.4	17.5	3.7	10.3	2.5	0.5	2.6	—	—	1.3
2時間以下	37.0	40.3	21.4	62.6	45.8	41.3	32.5	11.5	19.1	—	—	8.0
3時間以下	5.5	24.6	14.5	12.7	34.9	32.4	60.0	52.9	56.9	—	26.4	29.3
3時間以上	1.4	5.2	3.4	3.2	12.4	8.0	5.0	34.6	15.4	100.0	71.7	58.7

(註) 解答なし%省略 黒枠内は一致する数値

表(26)「就寝時間」についての母親の解答ごとに対応する子どもの比率 %

母親の解答 子ども	9時以前			9～10時			10～11時			11～12時			12時以降		
	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3	小学5	中学1	中学3
9時以前	57.1	36.4	80.0	7.5	4.3	5.6	—	0.5	0.4	—	—	0.3	—	—	—
9～10時	40.0	27.3	—	67.7	36.7	35.2	15.4	5.0	8.0	10.0	0.9	0.9	—	3.2	—
10～11時	2.9	27.3	20.0	22.0	46.0	31.0	70.8	57.7	48.5	20.0	10.3	6.6	—	6.5	—
11～12時	—	9.1	—	2.3	11.5	16.9	12.6	32.5	30.9	60.0	71.7	57.6	—	12.9	10.9
12時以降	—	—	—	0.2	1.4	11.3	0.8	3.5	12.2	10.0	16.7	32.6	—	77.4	88.3

(註) 解答なし%省略 黒枠内は一致する数値

る就寝時刻は、親子の一致が大きく現われている。中学1年においても、その時間帯の就寝は、子どもの解答によれば78.5%と、小学5年とそれほど大きな変化はない。しかし、その時間帯の就寝の認知は、大きく不一致が生まれる。とくに、9時～10時と母親が答えている場合、子どもは自分の寝る時刻をもっと遅く考えているのである。この傾向は、中学3年になるとさらに大きくなる。母親が10時～11時に就寝すると考えているのに、子どもの解答は、12時以降であるというのが、12.2%も存在する。

2) 「夕食の家族のだんらん」

夕食時の家族のだんらは、一日のうちで最も日常的な親子の会話や精神的触れ合い、食事に秘められている母親の情緒など、子どもの成長にとっての家族をとおしての人間的な接触の日常的、基礎的単位の保障の場でもある。

夕食とは、単なる生理的、身体的維持発達のためだけでなく、食べるという人間的行為の中に、文化そのものの存在があるのである。

しかし、テレビの普及や家族構成員の生活リズムの多様性は、夕食時の家族交流の場の積極的役割を困難にしている。

以上の問題意識から「夕食をたべながらテレビをみる子ども」「夕食を家族そろってするか」「夕食の時刻を決めている」という三つの選択肢を社会階層に対応させて分析した。

表(27)に示すように、全体的に学年が上がるにつれて、「夕食をしながらのテレビをみる」比率が高くなっている。この傾向が最も顕著に現われているのは、農林業である。農林業は、どの学年においても他の階層に比して夕食時のテレビ視聴を高くしている。250万以下の所得層も農林業と同じように夕食時のテレビ視聴を高くしている。これに反して、公務員、無職母親、600万以上の所得層の場合は低くなっている。しかし、それらの階層においても、小学5年に比べて中学3年の方がテレビ視聴が高くなっている。低い層も、小学5年の高い層と同程度の比率を示している。

(27) 食事中テレビにいつもみる比率と社会階層

%

	農 林 業	公 務 員	250万以下	600万以上	無職母親 男子	無職母親 女子	全 体
小学5	37.0	22.4	37.4	21.1	25.2	28.1	30.2
中学1	52.8	36.4	55.6	38.6	37.7	36.9	43.3
中学3	52.4	40.0	53.7	27.6	37.3	36.0	46.6

表(28)に示すように、社会階層ごとに夕食を決めている状況は、学年が上がるにつれて不規則になっている。全体的には、小学5年と中学3年では7.5%の差があるが、階層によっては、その差が著しい場合もある。農林業の場合、各学年をとおして、夕食を決めている比率を相対的に低くしているが、中学3年では、31.7%ときわめて少ない。それは、小学5年の場合と20.2%の開きをもっている。この他に、夕食の時間をきめている比率が60%を割っている階層は、技能労働者、雇用母親の男子、250万以下所得層となっている。技能労働者の場合、中学3年になっても極端な

表 (28) 社会階層ごとの夕食の時間をきめている比率

	農 林 業	商 業 ・ サ ー ビ ス 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 男 親 子	雇 用 の 男 親 子	無 職 の 男 親 子	自 営 の 女 親 子
小 学 5	51.9	75.7	62.7	80.6	83.2	71.3	71.4	85.2	69.9
中 学 1	50.9	73.1	74.3	74.3	81.8	69.6	77.6	87.7	61.4
中 学 3	31.7	66.1	56.6	75.7	80.0	63.9	59.7	82.4	60.8
	雇 用 の 女 親 子	無 職 の 女 親 子	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小 学 5	76.3	81.3	72.4	78.0	79.5	78.7	80.7	76.0	
中 学 1	69.8	82.5	67.7	83.1	77.7	81.0	72.9	74.4	
中 学 3	72.4	76.3	59.4	67.6	77.3	80.9	74.1	67.5	

減少はなく、その差は6.1%である。雇用母親の男子の場合、小学5年と中学3年の差は、11.7%、250万所得層は13%となっている。

公務員や無職母親の男子、450万～600万所得層は、中学3年において、8割以上の子どもが、夕食時刻が「きまっている」と答えている。それらの層は、小学5年との差はあまりなく、3%前後である。夕食時がきまっているかどうかというのは、学年差よりも家庭の事情が大きいと見られる。

表 (29) に示すように、夕食時を決めていない家庭でも、「夕食を家族そろってする」という階層が農林業、技能労働者、250万所得層にみられるのである。また、この層は、他に比して、「家族一緒に食事する」比率が著しく高いのである。この階層は、前記に示したように、夕食時を決めていない比率が多かった。つまり、これらの事実は、「夕食時刻がきまっている」という生活リズムと「家族一緒に食事する」ということは、家族の生活の多様性から別個の論理になっているのである。このことは、夕食を決めている比率の高い階層が、「家族一緒に食事する」比率の高いことを意味せず、逆に、著しく低い層もみられるのである。例えば、所得層が相対的に高い450万～600万、600万以上層や無職母親の男子などは、その事例である。所得の高い層は、小学5年においても、「夕食を家族一緒にする」比率を低くしている。この他に比率の低い層は、商業・サービス業となっている。この層は、夕食時を決めている比率も相対的に低かったのである。つまり、家業が忙しく、夕食の生活リズムも家族だんらんの余裕もないことが、その傾向を生じさせているとみられる。

全体的に、学年が上がることによって、夕食を家族一緒にする比率の大きな低下はみられないが、雇用母親の女子 (8.1%)、商業・サービス業 (6.4%) に低下がみられる。

ここで、農林業、技能労働者に典型にみられるように、「夕食時を決めていない」が、「家族一緒に夕食をしている」ということを考えないわけにはいかない。つまり、生活リズムと夕食のだんらんの保障が必ずしも統一できない状況があるからである。ここには、家族構成員の生活の多様性、

表 (29) 社会階層ごとの夕食を家族一緒にする比率

%

		農 林 業	商 業・ ビ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親	雇 用 の 母 親	無 職 の 母 親	自 営 の 母 女 親
小 学	5	88.9	74.8	84.7	75.7	79.0	76.6	80.4	79.1	79.5
中 学	1	86.8	76.7	83.8	70.8	83.3	82.3	76.3	78.3	82.2
中 学	3	88.9	68.4	85.8	71.9	81.4	78.4	80.6	75.5	75.5
		雇 用 の 母 女 親	無 職 の 母 女 親	250万 以下	250万 350万	350万 450万	450万 600万	600万 700万	全 体	
小 学	5	79.4	76.0	84.5	81.1	72.1	69.1	71.9	77.3	
中 学	1	88.9	71.8	84.8	78.8	78.4	70.5	68.6	78.7	
中 学	3	71.3	77.2	83.1	75.5	76.5	70.9	67.2	76.5	

不規則が根底的にあり、とくに、父親の生活の問題が深くかかわっているのである。しかし、家族を大切にすることがそれらの層に強く反映していることも重要な事実である。

「夕食時を決めている」比率も、「家族一緒に夕食をする」比率も、両方ともに高いのは公務員である。この層は、仕事の規則性による家族だんらんの生活保障の時間的余裕がうかがわれるのである。ところで、「家族一緒に夕食をする」という中には、父親の帰宅が遅いという問題も無視することはできない。

表 (30) に示すように、子どもの父親の仕事に対する理解度は、社会階層によって異なっている。雇用母親の子どもは、父親の仕事を「よく知っている」比率が低くなっている。中学3年において、雇用母親の男子は、他の階層と同じ位の比率になっているが、小学5年では、66.1%と他の階層に比して著しく低い。一般事務の子どもの場合も相対的に低くなっている。中学3年の雇用母親の女子も父親の仕事を「よく知っている」率が低い。同じ雇用母親でも男女によって理解度が異なっている。無職母親の男子は、「よく知っている」比率を高くしている。ここには、父親の仕事の認知状況に母親が一定の役割を果たしていることがうかがわれる。とくに、小学5年の場合には、その傾向が強いと見られる。中学3年の男子になれば、自分自身で父親を理解しようとする姿勢が生まれてくるが、小学5年の段階では、母親との接触をととしての父親理解が重要とみられる。

農林業、商業・サービス業で父親の仕事を「よく知っている」と答えている比率の高いのは、身近に、日常父親の仕事をみているからである。自営母親の場合は、男女とも父親の仕事に対する認知状況が高く現われている。これに対して、無職母親の女子、雇用母親の女子は、直接的に父親の仕事をみていないことやまた、その関心度合が男子よりも低いことから、中学3年でも父親の仕事に対する理解を低くしているのである。しかし、一般事務に比して、技能労働者、公務員の方が認知度が高いのも重要なことである。この階層は、父親の仕事を具体的、直接に見ていない子ども達

表 (30) 社会階層ごとの父親の仕事の理解の比率

%

	農 林 業	商 工 業・ ビ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 男 子 親 子	雇 用 の 男 子 親 子	無 職 の 男 子 親 子	自 営 の 女 子 親 子	雇 用 の 女 子 親 子	無 職 の 女 子 親 子	全 体
小 学 5	77.8	84.5	76.3	68.8	80.4	87.2	66.1	80.0	75.9	72.9	74.0	75.5
中 学 1	88.7	92.7	82.9	70.2	84.8	88.6	68.4	81.1	83.2	76.2	85.4	80.4
中 学 3	88.9	90.4	83.0	76.2	82.9	81.4	80.6	85.3	82.4	71.3	75.4	80.9

であるが、家族の会話の中でわかっていくのである。この階層は、夕食時においても、「家族一緒です」比率を高くしている。

3) 親子の生活の中でのコミュニケーション

母親からみた子どもの接触状況として、「テストの成績」「友だちのこと」「悩みごとの相談」を母親に話しているかどうかを調べてみた。

テストの成績をみせている子どもは、全体として、小学5年で54.1%，中学1年で50.8%，中学3年で41.6%であり、学年が上がるにつれて母親にみせなくなっている。地域的には、近効農村の子どもが各学年ともみせなくなっている。職業階層でも、農林業が中学になると著しく見せなくなっている。この階層では、中学1年22.6%，中学3年34.9%と「見せている」比率がきわめて少ない。その他の階層については、とくに一定の傾向を示しておらず、全体の状況に近似している。

表 (31) 母親の雇用状況と母親との相談・友だちのことをよく話す比率

%

		自 営 の 男 子 親 子	雇 用 の 男 子 親 子	無 職 の 男 子 親 子	自 営 の 女 子 親 子	雇 用 の 女 子 親 子	無 職 の 女 子 親 子	全 体
小学5	友だちのこと	55.3	42.9	51.3	78.3	72.9	75.0	62.4
	悩 み ご と	48.9	53.6	61.7	77.1	79.7	76.0	63.3
中学1	友だちのこと	35.4	39.5	56.6	64.4	66.7	73.8	56.7
	悩 み ご と	44.3	42.1	59.4	57.4	61.9	67.0	55.7
中学3	友だちのこと	23.7	41.7	33.3	52.9	71.3	71.1	46.5
	悩 み ご と	27.8	38.9	33.3	41.2	52.9	58.8	43.5

「友だちのことについて母親にいつも話しているか」ということについては、社会階層的に一定の傾向をもっていない。表(31)に示すように、そこでは、男女差が大きく現われている。全体的に、母親にいつも話していると答えているのは、小学5年62.4%，中学1年56.7%，中学3年46.5%であり、男子については、学年が上がるにつれて極端に話さなくなっている。「悩みごとを母親に話す」ということについても上記と同様の傾向が生まれている。

表(32)に示すように、子ども側からみて、「父母にいつも会話しているか」という比率は、農

表(32) 社会階層ごとの父母といつも会話する子どもの比率

%

		農 林 業	商 工 業・ ビ ジ ネ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親 子	雇 用 の 母 親 子	無 職 の 母 親 子	自 営 の 母 女 親 子
小 学	5	63.0	63.6	61.0	68.8	72.0	50.0	66.1	62.6	74.7
中 学	1	50.9	58.0	58.1	58.5	62.1	41.8	51.3	67.9	65.3
中 学	3	33.3	49.2	50.9	60.5	66.4	29.9	51.4	52.9	50.0
		雇 用 の 母 女 親 子	無 職 の 母 女 親 子	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小 学	5	78.0	77.1	66.1	64.6	73.0	69.1	70.2	66.3	
中 学	1	66.7	66.0	56.6	60.2	56.1	60.0	64.3	58.7	
中 学	3	69.0	75.4	46.9	53.2	59.7	60.9	63.8	54.7	

林業、自営母親の男子、250万以下所得層が相対的に低くなっているが、公務員、無職母親の女子は高くなっている。階層的に一定の傾向が現われていて、農林業については、父母といつも会話することが少ないことは、「夕食をいつも一緒にしている」とことと矛盾している。ところで、「夕食しながらテレビをみる」比率の高かったのも農林業であり、中学3年になるとその傾向がとくに強かったのである。公務員の家庭の場合は、夕食のテレビ視聴の比率も少なく、また、「夕食を家族一緒でする」比率も高かったのである。そして、「いつも父母と会話する」子どもの比率も各学年とも他の職業階層に比して高いのである。ここには、意識的な子どもとの会話の時間が家庭の中に存在していることを意味している。しかし、公務員の家庭だからといって、とくに、「テストの成績をいつも見せる」「友だちのことを話す」「悩みごとを相談する」比率が高いということには必ずしもなっていない。これらのことは、社会階層的な家庭の状況よりも個々の家庭の個性、子ども自身の内的な問題が大きく存在しているとみられる。

4) 「子どものねだり」と「小使い」

表(33)に示すように、「欲しいものがあると、いつまでもしつこくねだる」という子どもは、母親からみれば、全体的にどの学年も1割程度で大きな学年差はない。ときには、「しつこくねだる」という子どもは、約半数近く存在する。職業階層、母親の雇用状況においても特徴はない。所得階層的には、上層の方が、「しつこくねだる」子どもが少なくなっている。600万以上所得層の場合、「しつこくねだる」子どもは、小学5年3.5%、中学3年5.2%である。一方、250万以下所得は、「ときにはも含めてのしつこくねだる」は、小学5年の場合、71.3%と高率になっている。

小使いについて、一定金額決まっている子どもは、全体で小学5年41.6%、中学3年48.7%となっているが、これは、階層的に大きく異なっている。250万以下所得の場合は、小学5年で32.2%、中学3年では34.4%と低く、600以上所得の子どもは、小学5年で52.6%、中学3年で55.2%と高くなっている。

表 (33) 社会階層ごとの子どものねだりと小使い一定金額を決めている比率 %

			農 林 業	商 工 業・ ビ ジ ネ ス サ 業	技 能 ・ 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 男 親 子	雇 用 の 男 親 子	無 職 の 男 親 子	自 営 の 女 親 子
ね だ り	小学 5	しつこくねだる と き に は	7.4 59.3	8.7 57.8	11.9 55.9	7.6 56.3	8.4 45.5	8.5 54.3	12.5 62.5	8.7 53.9	6.0 60.2
	中学 3	しつこくねだる と き に は	6.3 54.0	11.3 52.5	9.4 41.5	10.3 44.9	9.3 38.6	13.4 44.3	8.3 45.8	8.8 47.1	8.8 51.0
小 使 い	小 学 5		22.2	44.2	31.4	50.0	39.9	44.7	44.6	51.3	41.0
	中 学 3		22.2	48.0	51.9	55.7	57.1	39.2	59.7	59.8	41.2
			雇 用 の 女 親 子	無 職 の 女 親 子	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
ね だ り	小学 5	しつこくねだる と き に は	6.8 55.9	3.1 56.3	11.5 59.8	12.6 52.8	5.7 52.5	8.5 58.5	3.5 57.9	9.1 56.3	
	中学 3	しつこくねだる と き に は	10.3 44.8	10.5 37.7	10.0 42.5	11.5 43.2	10.1 50.4	17.3 40.0	5.2 44.8	9.9 45.7	
小 使 い	小 学 5		25.4	39.6	32.2	44.1	46.7	51.1	52.6	41.6	
	中 学 3		49.4	53.5	34.4	51.1	60.5	63.6	55.2	48.7	

小使いの一定金額が決まっていない比率の高いのを職業階層的にみれば、農林業である。小学5年で22.2%，中学3年で22.2%の子どもしか「小使いが決まっていない」という状況である。しかし、農林業の子どもは、「しつこくねだる」比率は決して高くない。小学5年で7.4%，中学3年で6.3%と他の職業階層に比して少ないのである。

公務員の場合もねだる子どもの比率が低くなっている。この階層では、中学3年になると「一定金額を決められている」子どもが57.1%と6割近くになっている。

4. 子どもの生活での家族の位置と社会階層

子ども自身が生活の基礎単位の家庭で、その一員として共同生活をしている責任と自覚をもたせていくことは、思いやりや協調性の成長にとって重要なことである。子ども自身の仲間集団を通じての内発的な協調性と家族の中で作られていく役割意識、自己の位置の意味づけなどを大人との関係で作り上げていくことも、子どもの社会化にとって重要である。家庭とは、情緒的な側面を基底的にもっており、両親の愛護と責任のもとで人間的な協調性を子どもに保障する場である。

子どもが、家族のものへのあいさつをすることは、家族員同志の愛情が秘められた行為の確認の1つであり、単なる形式的な儀礼でない。それは、感情をもった人間の生活にとって不可欠なけじめである。外出するときの行先や帰宅時間を告げることも同様である。さらに、外出するときの連絡は、子ども自身に家族の一員としての共同生活の自覚をもたせていくことであり、また外での行

動に責任をもち無軌道に走らないためにも重要なことである。

ところで、子どもに手伝いをさせることは、家庭における役割を自覚させ、共同生活の一員であることへの連帯性を自覚させることであり、その中で、子ども自身が自己の行為の価値を位置づけていくことができる。そして、しごとの中で生活を実感し、家庭としての思いやりや協調性を身につけていく可能性をもつものである。家族の一員として子どもが親のしごとを助けながら、自からも成長していくということは、職住が大きく分離している現代の多くの労働者家庭にとって重要なことである。つまり、家庭がもっぱら消費生活の場になってきている状況のもとで、親の扶養の意味や、子どもを育てる生活の苦勞も理解されないのである。また、子ども自身が家での手伝いをしなくても家業や家事が出るようになってきている。このような中では、親が目的意識的に子どもの手伝いを位置づけていく必要がある。

以上のような問題意識から本項では、親と子どもの双方から三つの質問を行なった。それは次に示すとおりである。

1つには、「家を出るときいつてまいります、帰ったときただいまなどと家の人にあいさつをしているか」(家の人へのあいさつ)、2つには、「外出する時、家の人に行先や帰宅時間をいうか」(外出時の連絡)、3つには、「お父さんやお母さんに仕事をたのまれたらすぐするか」(手伝い)である。

1) 家の人へのあいさつ

表(34)に示すとおり、「家を出るとき、帰ったときのあいさつ」をいつもしているという解答は、母親も子どもも全体的に高率である。学年が上がるにつれて、多少の低下もあるが、母親の解答では、小学5年で88%、中学3年で79.2%の子どもが、「いつもしている」ということである。母親と子どものズレでは、少しばかりであるが、母親の方が「よくしている」とみているのである。この傾向は、社会階層によっては、さらに大きく開いている。自営母親男子の3年は、「あいさつをいつもする」比率を他に比して非常に低く、子どもの解答では、53.6%であるが、母親の解答は70.1%となっており、16.5%の開きがある。さらに、農林業の中学3年も、子どもの解答は47.6%であり、母親との解答の差は、17.5%と大きい。この二つの階層は、中学3年になって極端に悪くなっているのである。とくに、農林業の場合、小学5年では、最も高かったのである。中学3年の場合、子どもの解答が他に比して低い技能労働者、250万以下所得層も、自営母親の男子ほど大きくないが、同様に母親との差をもっている。

ところで、小学5年から雇用母親の男子も他に比して「あいさつをしている」比率を低くしているが、母親との解答のズレは、それ程大きくない。

「あいさつをいつもしている」比率の高い階層は、公務員、無職母親の女子、600万以上所得層となっている。

表 (34) 社会階層ごとの「家を出るとき、帰ったときのあいさつ」をいつもする子どもの比率 %

		農 林 業	商 業・ ビ ジ ネ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 男 子 母 親	雇 用 の 男 子 母 親	無 職 の 男 子 母 親	自 営 の 女 子 母 親
小学5	子ども解答	96.3	87.9	83.1	88.2	93.0	87.2	75.0	89.6	90.4
	母親解答	92.6	89.3	79.7	91.0	93.7	88.3	76.8	89.6	90.4
中学1	子ども解答	81.1	83.1	89.5	85.4	90.9	83.5	72.4	89.6	91.1
	母親解答	81.1	80.4	84.8	90.6	90.9	82.6	78.9	93.4	87.1
中学3	子ども解答	47.6	74.6	66.0	80.5	85.0	53.6	66.7	78.4	73.5
	母親解答	65.1	83.6	73.6	78.9	83.6	70.1	70.8	80.4	79.4
		雇 用 の 母 女 親	無 職 の 母 女 親	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小学5	子ども解答	91.5	92.7	81.6	87.4	94.3	91.5	93.0	87.8	
	母親解答	98.3	90.6	83.3	85.8	88.5	93.6	93.0	88.0	
中学1	子ども解答	88.9	87.4	78.8	83.9	90.6	89.5	90.0	85.0	
	母親解答	88.9	92.2	77.8	81.4	87.1	93.3	94.3	85.2	
中学3	子ども解答	85.1	88.6	63.7	72.7	82.4	85.5	87.9	74.5	
	母親解答	88.5	90.4	76.9	78.4	83.2	80.0	86.2	79.2	

2) 「外出時の連絡」

表 (35) に示すように、外出時の連絡は、外出、帰宅のあいさつと比べると極端に悪くなっている。全体では、子どもからみた場合、いつもしていると答える比率は、小学5年で32.8%，中学3年で25.1%と学年が上がるにつれて減少している。とくに、中学3年になると母親とのズレが大きく、16.1%母親が高くなっている。

社会階層的には、雇用母親の男子が「あいさつ」と同じように、各学年とも「いつもしている」比率を低くしている。子どもの解答では、各学年とも10%代である。中学3年では、母親は、15.3%も多く、解答しているのである。その開きが最も大きいのは、600万所得層の中学3年で、母親は60.3%の人が、「いつもしている」と答えているのに対して、「いつもする」子どもは、34.5%なのである。

外出時の連絡をいつもしているという解答が、どの階層、学年においても、母親の方が率が高いことは、母親自身の子どもへの安心感があるのである。また、子どもの方は、母親に連絡をしていないという自由性をもっているのである。子どもの家庭外での行動を管理主義的に行動の枠をはめていくことは、子どもの自立性、自由性を大きく奪うものであるが、しかし、子ども自身の行動の責任を、家庭との関係で自覚させていくことも重要なことである。このような意味から、子どもの自発性による行先や帰宅時間の連絡のしつけは、大切なことである。多くの子どもが出来ていない中で、この問題は、とくに考えていく必要がある。

表 (35) 社会階層ごとの「外出するときに家の人に行き先や帰宅時間」
の連絡をいつもする子どもの比率

%

		農 林 業	商 業・ ビ ジ ネ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親	雇 用 の 母 親	無 職 の 母 親	自 営 の 母 女 親
小学5	子どもの解答	18.5	35.9	28.8	36.8	36.4	24.5	16.1	24.3	49.4
	母親の解答	33.3	44.7	25.4	35.4	35.0	28.7	12.5	23.5	50.6
中学1	子どもの解答	15.1	31.1	30.5	34.5	37.1	19.0	17.1	28.3	33.7
	母親の解答	26.4	39.7	38.1	43.9	47.0	29.1	22.4	44.3	40.6
中学3	子どもの解答	15.9	23.2	21.7	28.1	29.3	9.3	12.5	17.6	33.3
	母親の解答	30.2	44.1	26.4	43.8	45.0	28.9	27.8	39.2	44.1
		雇 用 の 母 女 親	無 職 の 母 女 親	250万 以下	250万 ～ 350万	350万 ～ 450万	450万 ～ 600万	600万 ～	全 体	
小学5	子どもの解答	37.3	51.0	28.2	33.9	39.3	37.2	29.8	32.8	
	母親の解答	54.2	53.1	29.3	32.3	49.2	43.6	36.8	35.7	
中学1	子どもの解答	30.2	48.5	25.8	28.8	31.7	40.0	38.6	30.8	
	母親の解答	33.3	57.3	34.3	39.0	36.7	49.5	44.3	40.4	
中学3	子どもの解答	29.9	42.1	15.0	23.7	28.6	30.9	34.5	25.1	
	母親の解答	41.4	47.4	32.5	43.9	37.8	49.1	60.3	41.2	

表 (36) 子どもの手伝い状況

%

		小 学 5 年	中 学 1 年	中 学 3 年
子どもの解答	だいたいする	75.3	70.6	69.5
	勉強中はしない	9.2	9.7	7.5
	遊び中はしない	4.5	4.4	4.1
	しないほう	6.3	9.4	13.7
	たのまれない	4.1	4.7	4.6
	解 答 な し	0.7	1.2	0.5
母親の解答	すすんでする	13.7	12.8	14.6
	たのめばする	66.4	62.3	57.9
	ときにはする	15.9	20.0	20.4
	し ない	2.0	3.1	5.0
	させていない	0.5	1.1	1.4
	解 答 な し	1.4	0.7	0.7

3) 「手伝い」

表 (36) に示すように、全体として、「父母に仕事を頼まれたら」、小学5年で75.3%，中学3年で69.5%と多くの子どもは、「だいたいする」と答えている。学年が上がるにつれて、わずかわかり「する」子どもが減少しているが、しない内訳は、中学3年の場合、「勉強中しない」7.5%，「遊び中しない」4.1%，「しないほう」13.7%とやらないのは、事情があってよりも家の手伝い

を日常的にしていない方が多いのである。ところで、母親から「仕事を頼まれることはない」としている子どもは、どの学年も4%代ときわめてわずかである。母親の解答でも「仕事をさせていない」とする解答は、0.5%から1.4%とほとんど見当たらない。

ところで、家の仕事や家事の手伝いをすすんでする子どもは、10%代とわずかである。つまり、子ども自身手伝いを積極的にうけとめ、家族の中での一員として自己の役割を自覚しているのが弱い。

表(37)に示すように、社会階層によっては、手伝い状況が、学年によって差が出ているのである。600万以上所得層は、小学5年において、手伝いを相対的によくしているのであるが、中学3年になると低くなる。この結果、他の階層に比して、手伝い状況が悪くなるのである。これと同じ現象は公務員、無職母親の男女とも現われている。

自営母親の女子は、各学年とも手伝いをしている比率が高い。そして、「すすんでしている」子

表(37) 社会階層ごとの「仕事をたのまれたらする」子どもの比率 %

			農 林 業	商 工 業・ ビ ジ ネ ス サ 業	技 能 労 働 者	一 般 事 務	公 務 員	自 営 の 母 親 子	雇 用 の 母 親 子	無 職 の 母 親 子	自 営 の 母 女 親 子
小学5	子 ども の 解 答		85.2	78.2	69.5	71.5	78.3	68.1	75.0	73.9	80.7
	母親の解答	すすんでする たのめばする	11.1 59.3	14.6 67.0	12.7 65.3	16.0 66.0	16.1 69.2	14.9 66.0	12.5 69.6	8.7 69.6	16.9 63.9
中学1	子 ども の 解 答		75.5	68.5	78.1	69.0	72.7	79.7	72.4	67.0	76.2
	母親の解答	すすんでする たのめばする	22.6 56.6	13.2 66.2	11.4 67.6	8.2 62.0	12.1 60.6	15.2 69.6	3.9 68.4	9.4 66.0	23.8 57.4
中学3	子 ども の 解 答		76.2	71.8	64.2	72.4	65.7	70.1	68.1	62.7	70.6
	母親の解答	すすんでする たのめばする	28.6 54.0	11.9 61.6	16.0 53.8	11.9 60.0	14.3 57.9	16.5 63.9	15.3 58.3	9.8 62.7	20.6 55.9
			雇 用 の 母 女 親 子	無 職 の 母 女 親 子	250万 以下	250万 350万	350万 450万	450万 600万	600万 700万	全 体	
小学5	子 ども の 解 答		81.4	81.3	70.1	70.1	77.9	77.7	78.9	75.3	
	母親の解答	すすんでする たのめばする	13.6 72.9	14.6 72.9	13.2 66.7	9.4 74.8	17.2 63.1	17.0 67.0	14.0 63.2	13.7 66.4	
中学1	子 ども の 解 答		71.4	66.0	71.2	70.3	66.9	78.1	68.6	70.6	
	母親の解答	すすんでする たのめばする	7.9 55.6	16.5 59.2	15.7 60.1	11.0 66.9	7.9 62.6	14.3 65.7	14.3 55.7	12.8 62.3	
中学3	子 ども の 解 答		77.0	63.2	70.0	64.0	69.7	73.6	62.1	69.5	
	母親の解答	すすんでする たのめばする	18.4 55.2	11.4 54.4	16.9 56.9	10.1 59.7	13.4 63.9	10.0 54.5	19.0 48.3	14.6 57.9	

どもも他に対して高くなっている。中学3年では、「すすんでしている」ことで無職母親の女子との差は、9.2%存在している。農林業においても、自営母親の女子と同じように、子どもの手伝い状況が高い。中学3年で、全体が10%代の中で、「すすんでする」子どもの率が28.6%となっている。

手伝い状況は、どの階層、どの学年とも母親の方が、子どもよりも甘くみているのが特徴である。600万以上の所得層の場合、中学3年の子どもの解答では、手伝いをいつもしているのは、他の層に比して最も低かったが、しかし、母親の解答では、「すすんでする」と答える比率が他の階層に比して最も高いのであった。

あ と が き

本稿では、鹿児島市内の新興住宅地帯、旧住宅地帯、商業地帯、近郊農村地帯の子どもの生活実態を4つの柱をたてて社会階層ごとに分析した。「まとめ」として、ある特定の階層によって問題を整理するということは、個々の質問項目と社会階層との関係を深めて考えることに問題点を残すので敢えて省略した。つまり、個々の問題状況は、具体的事例、教育実践を媒介として深めていかねばならず、社会階層的な問題だけで切ことは出来ないからである。

本稿は、「鹿児島の子どもと親の生活と意識」調査分析でも中間報告的なものであり、それぞれの項目によって、さらに、クロス分析を継続していかなければならない。さらに、1981年2月に実施した離島、農村調査の結果とクロスして、鹿児島県全体の分析に広げていく課題が存在している。本研究は、鹿児島子ども研究センター（岡本洋三所長）の光同研究の一環であり、所員の共同の研究成果であるが、論文の責任は、執筆者自から負うものである。最後に、集計・データ処理には鹿児島大学電子計算機室に大変お世話になった。本研究が、少しでも鹿児島県の教育発展に寄与できれば幸いである。本稿に関して、父母、教師をはじめ多くのご批判と教示を期待している。

(1981年10月14日)